

## 初年次における多学科連携教育に関する実践報告

山 本 倫 子      井 上 茂 樹  
中 嶋 貴 子      津 川 秀 夫\*

Practical report on multidisciplinary collaborative education in the first year of study

Tomoko YAMAMOTO, Shigeki INOUE,  
Takako NAKASHIMA, Hideo TSUGAWA\*

### 要旨

多様化する医療ニーズに対応するため、文部科学省は「21世紀の医療人養成に関する提言」をまとめた。医療人をはじめとする対人援助職の教育には、地域に根ざした専門教育に加え、広い視野を持った教育も必要かつ重要であり、教養科目と専門科目の一貫した教育実践が期待されている。今回、成人学習理論を参考に1年生が受講する教養科目を活用し、医療保健福祉人材の育成を目指した多学科連携講義を行った。授業後の受講生の振り返りから、受講生が広く人の生活、教育、社会制度などに関心をもって主体的な学習を行ったことや、多学科学生との話し合いが学習の視野を広げたこと、チームワークについて省察した様子が確認された。専門教育科目が未学習の初年次においても、教養科目を活用しながら医療保健福祉人材の育成ができるのではないかと考えられた。

**キーワード**：初年次大学生、多学科連携教育、医療保健福祉職人材育成、成人学習理論

**Key words**：First year students of university, multidisciplinary education, human resources development for medical and healthcare welfare workers, adult learning theory

### 1. はじめに

対人援助職の職務は実践方法に違いはあるが、「社会構成員にとっての健康と幸福を目指し、良いことをする」ことを基本的な共通目標としている。そして、対人援助職者がこの基本的な共通目標に到達するためには、流動的で複雑で曖昧な人や社会への対峙が必要となる。つまり対人援助者は、援助に必要な道具である専門的で基礎的な知識・技術の学修と使用を必須としながら、同時に「自らが選択した対人援助の知識・技術の使用は本当に適切か」という問いを自身に向け、悩み・迷いながら人や社会に対峙している。そして周囲の協力者と連携・協業しながら、健康と幸福を実現するための一応の最適解を選択し、健康と福祉の実現を目指している。

対人援助の一つである医療領域についてみると、

文部科学省「21世紀医学・医療懇談会」の第1次から第4次（平成8～11年）において、21世紀に向けた医療人育成として、「医療人としての能力・適性に留意した人材選考」「人間性豊かな医療人」「患者中心、患者本位の立場に立った医療人」「多様な環境の中で育つ医療人」「生涯学習する医療人」を育成する考えを示している<sup>1)</sup>。特に第1次報告では、豊かな人間性、深い教養及び医療人としての倫理性の重要性を強調する必要を示し、医療人と医療を受ける者との関係性や、医学・医療を取り巻く環境の変化への適切な対応、倫理的・法的な知識や医療経済を含めた社会問題に関する知識の修得への努力などを示し報告している。そして、患者の立場に立った体験学習や自己学習力や自己問題提起・解決能力など生涯学習の態度・習慣を修得させる教育の必要を示し、教養

吉備国際大学大学院保健科学研究科  
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町8  
Graduate School of Health Science, Kibi International University,  
8 Igamachi, Takahashi-city, Okayama 716-8508, Japan

\*吉備国際大学心理学部心理学科  
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町8

\*Department of Psychology, School of Psychology Kibi International University  
8 Iga-machi Takahashi City, Okayama 716-8508, Japan

教育と専門教育との有機的な連携に配慮した一貫教育による大学教育全体を通じて行われるべきものと報告している<sup>2)</sup>。

阿部<sup>3)</sup>は、看護以外の医療技術系大学においても、専門学校のような国家試験受験を目標とする単なる指定科目の履修からはみだし、専門の知識・技術、人間性、課題探求、課題発見、課題解決などのための教養科目の重視や入学早期からの体験、学生参加型、問題解決型授業の重要性を述べている。そして、21世紀に求められる医療人の育成に関する課題は、連携する専門職種の多様さという昨今の特徴を踏まえ、学習支援の方法や学習教材の選定<sup>1, 4, 5)</sup>など、様々な視点で解決が試みられている。

このことを本学においてしてみると、本学の医療保健福祉領域の教員は、「医療保健福祉の領域について学びを求める学生に対し、大学在籍期間に提供するその全てを活用し、社会が要請する医療保健福祉人材を育成とすることが求められている」と言える。今回、成人学習理論<sup>6)</sup>を参考に、初年次学生が履修する本学の全学共通教養科目のSDGs概論を活用し、多学科連携教育の形式を導入した医療保健福祉領域の人材育成を目指す講義をしたので、この実践について以下に紹介・報告する。

## 2. 講義設計

### 1) 多学科連携教育の参加対象学生について

保健医療福祉学部看護学科、理学療法学科、作業療法学科、心理学部心理学科の4学科の1年生に講義を実施した。入学前の進路決定にあたり対人援助を志向する学科の学生であり、多様な価値観や教育を経験した学生の参加が望ましいため、学部を超えた教員の協力のもと、4学科合同で講義を実施した。

### 2) 全学共通教養科目を活用した講義について

対人援助である医療保健福祉領域の人材育成を目指す

ために、初年次入学者が経験する全学共通教養科目のうち2022年6月中旬より開講された全学共通教養科目であるSDGs概論（全8回講義）を活用した。SDGs概論は「学生自身の責任において主体的に学ぶこと」を基盤とした講義である。学生は「地球環境システムと人間社会システムの現状」と「SDGs達成に向けて実際にどのような取り組みが行われているか」を学び、受講をとおりて広い視野をもって人や生活環境について学ぶ、課題探求・課題解決型の講義である。医療保健福祉人材の育成は単一科目の講義参加により成し得るものではないが、SDGs概論の講義目的及び構成は、医療保健福祉領域の初学者の教養を高め、期待される医療保健福祉人の素地の育成に活用できると考えた。

### 3) 講義構成及び概要、スケジュール（表1）

2022年6月中旬より開講された講義の全8回のうち、第1～4回はオンライン接続にて「地球環境システムと人間社会システムの現状とSDGsの必要性と意義の理解」をテーマに「持続可能な開発目標SDGs」についての背景やSDGs17の目標についての概要やSDGs達成に向けて実際にどのような取り組みが行われているかについて教授された。第5～8回は、学科別講義のため、2022年7月中旬より多学科連携講義を導入した。第5回目はSDGs目標3「すべての人に健康と福祉を」に着目した、障がい経験者による「これまでの地域における生活経験と共生社会に期待すること」をテーマとした語りを聴講する回である。第6、7回目はSDGs目標3を実現する方法について検討・提案するためのグループワークの回である。多科学学生で構成されたグループで、課題について話し合い、調べ学習に取り組む時間とした。第8回目はSDGs目標3を達成する方法の提案を発表する学習成果発表会を設けた。

表1. 2022年度SDGs概論講義計画

回	学習テーマ	内容等
1	SDGsとは何か	1) 世界の現状、2) 持続可能性、3) SDGsを学ぶ必要性
2	2030アジェンダ採択までの経緯	1) SDGsの背景、2) SDGsの概要
3	SDGsが目指している世界	1) SDGsが目指している世界、2) SDGsを目指した取組
4	SDGs17の目標	1) SDGs17の目標の解説
5	外部講師による講演 講演テーマ: これまでの地域における生活経験と共生社会に期待すること	地域在住の障がい経験者による講演 1) 人生史や現在の生活、2) 健康と幸福、3) 社会課題検討（個人）
6	健康と福祉を実現する社会をどのように構築するか（目標3に着目し）検討 外部講師との交流（質疑・応答）	1) 社会課題の共有・設定、 2) グループで扱う社会課題に関する調べ学習と解決の検討
7	社会課題解決のための提案の検討と整理、協働・連携の経験	1) 第6回目講義の整理、2) 学習成果発表会の準備
8	学習成果発表会	1) 社会課題解決の提案の実践、 2) 社会課題解決についての提案の共有・学習

#### 4) 教員の役割

##### a. 学習教材の準備及び配布

講義終了ごとに記述された授業振り返りシートを活用し、学生が疑問にもった内容について応答する資料を作成し配布した。進級後に取り扱うことが予測される専門知識であっても、あるいは全ての学生において共通する疑問でなくとも、知識の提供で疑問の解消が補えると思われたものについては資料を作成し配布した。

##### b. 教員自身も学習の参加者であるとする立場と、参加者の学び促進のための「そそのかし」

第5回目以降は、教員自身も、もてる知識や技術、個人的な経験や意見を参加学生に披露した。これは、学生への正解提示の意図ではなく、人の健康と幸福と社会課題について、共に考え、学び、挑戦する立場を示すことにあった。例えば、地域在住の障がい者の講演の際には、講演者に普段の関りが学生の目に触れることについて事前に説明したうえで講義に参加してもらい、学生に、講義会場の教員らの普段どおりの関り方（相手との関係性や相手の障害特性を踏まえ、あるいは相手の反応に応じた声のかけ方・内容・関り方を調整する様子）を披露した。教員の姿を、全方位全面支援者としての技術披露ではなく、時に人として、時に障がいに対する理解者として関る姿勢をそのまま披露した。第6、7回ではグループを巡回し、議論に参加しながらグループの状況に応じた「そそのかし」に取り組んだ。これは、教員は学生と共に考え挑戦する立場を示すと同時に、グループの課題探求活動を促進することにあった。グループワークに共感を示しながら、議論が停滞する場面では、参加者の視野を拡大するような意見提示や提案を行い、議論が表層的に簡潔している場面では、疑問や質問などを行った。

#### 5) 倫理的配慮

本報告への協力依頼について、講義参加学生に対し科目の成績判定後に、本報告に関する目的及び方法等につ

いて学科掲示板を活用してオプトアウトを行った。オプトアウトの掲示後には、内容確認の依頼・声掛けを行った。さらに、報告の目的及び方法、報告で扱う情報は個人と連結しない状態で報告すること、本報告への情報提供に関する非同意の意思表示の機会を設けることについて口頭でも説明し、講義参加に関する情報提供の依頼を行った。（吉備国際大学倫理審査委員会承認番号:24-04）

#### 3. 結果

##### 1) 初年次学生を対象とした対人援助職の人材育成について

講演者であるA氏の人生史、現在の生活環境と幸福感についての語りを聴き、学生らは自身がこれまで身近に見聞きしたことがないような現実があることを知り様々な現実社会を学ぶ機会となったこと、また、専門職者がいるから幸福ではないことへの気づきや、対人援助では相手への理解や相手の意思決定への関心を向けることの必要についてなど、気づきを深めている様子の記述があった。（表2）

##### 2) 多学科連携教育による対人援助職の人材育成について

医療保健福祉領域を共通とする学科の学生との交流による講義であった。「面白かった」「楽しかった」「新しい発想の獲得ができた」などの記述があった。また、普段関りのない学生同士による話合いに試行錯誤する様子や、良いチームワークについて志向し思考する記述がみられた。（表3）

##### 3) 教養科目を活用した医療保健福祉領域の対人援助職の人材育成について

学習成果発表では、テーマ未設定のグループ1グループを除き、19グループの発表テーマ（表4）が提出され、学習成果発表会では全20グループによる課題発表がなされた。障がいの理解やサポート環境に着目するテー

表2. 障がい経験者による語りの聴講後の学生の振り返り（振り返りシートより抜粋）

今までの生活の中で障害のある人にあまり出会ったことがないので、持っている人に実際の話聞くことができ、将来看護をするにあたって少し生かせることがあるなと感じたので、聞くことができてよかった。
今日の講義の時間を通して、障害を持っていたとしても自分の意識で決定を重ね、人生を進んでいくことができること、施設に居る、専門家がいるということが幸せとは限らないということを知ることができた。
どのようなことに困っているのか、どのようにしてほしいのかを学ぶことで自分のこれからの経験に活かせると思いました。
人によってあうあわないがあるから、これが正解というものはないのだなと改めて思った。
今回のお話を聞いて、私の知らない世界だったので、ただ単に知ろうとするのではなく、理解することも大切になって来るなと感じました。
今日の講義を聞いて講師の人は自分とは全く違う人生を歩んでいたの、聞く話すべてがとても勉強になった。
障害を持っているから人と違うと見られがちだけど、障害がなくてもひとりひとり違っているわけだし、それを理解し、受け入れあうことが大事だと思います。
自分が経験したことのない過去の気持ちはわからないので、今日の講義で聞いた当時（イライラした時）の気持ちを元に、様々な感情を考えられる人間になりたいと思いました。

表3. 多学科連携教育による社会課題解決のための提案の検討後の振り返り（振り返りシートより抜粋）

今回、グループ課題をした人たちは同じ医療系の科とは言え、全くの初対面であったため、なかなかグループワークが進まず、もう少し次からは活発にしていきたいと思った。しかし、この経験があるからこそ、こういうときにリーダーシップもメンバーシップを発揮しなければならないと学ぶこともできた。
4学科合同で今回の講義でも様々な考え方がありとても面白かったです。1つの質問でも考え方が変わることで答えが多くあることが楽しかったです。
今日の講義の時間は、新たな出会いがあって関ったことがない学部・学科と関ることができたし、新しい発想も加わったのですごくいい時間になったと思います。
他の学科の人と交流する機会ができて、新鮮な感じがして面白かった。
体験された人の話を聞き、考えることは初めてで難しいことですが、これも将来の理学療法士になるためには必要なことだと考えました。
もっとこのような授業を通して自分の考えや知識を膨らませていきたいと思いました。
グループは、普段話せない人の集まりだし、それぞれに自分の意見があるので、譲歩しながら自己主張しなければ対立したり、雰囲気が悪くなったりしたらその後の発表に響くから、みんなで協力してよい発表を作っていきたいと感じた。
他学科の人と話す機会や今回のように話し合いなど発表することがないので、チームワークが取りにくい部分も最初はありました。しかし、話し合いをしていくうちにコミュニケーションが取れるようになり、アイデアや思ったことを口にしていくうちにチームワークが良くなったと思うことができました。

表4. 学習成果発表会の発表テーマ

SDGs目標を実現するためには
運動習慣について
講義を聴いて私たちにできること
交通事故に対する取り組みについて
ヘルプマークについて
障がい者への理解を深める
知識の普及とつながりの強化
ユニバーサルデザイン
みんなが健康にいるためには
バリアフリーについて
障害への理解を増やす
すべての人に健康と福祉を
新生児死亡率
SDGs目標3を達成するためには（差別をなくすためには）
すべての人に健康と福祉を分配する方法
住みやすい環境づくりーヤングケアラーと将来への社会的問題ー
みんなが自分の希望をかなえられるようにサポートしあえるコミュニティづくり
～環境に着目して～
障害者を知るためには……

\*全20グループの学習成果発表があったが、1グループにおいて、発表題目未定であった。

マの発表もあれば、外部講師の講演内容とは別に、運動習慣や交通事故、新生児死亡率、健康と幸福の分配方法など、多岐にわたるテーマの学習成果発表がなされた。学習成果発表会の参加について「新たな知識を得ることができた、専門職を目指す一大学生として早い段階から自分の視野をわずかではあるが広げることができたのではないか」といった記述が確認された。（表5）

#### 4. 考察

##### 1) 教養科目を活用した医療保健福祉領域の対人援助職者の人材育成について

大学における「教養とは何か」「教養と教育の違いは

何か」といった問いへの検討は昔からあり<sup>6)</sup>、これに答えるプレッシャーは常につきまとうが、教養とはおそらく「多くの知識を得るにとどまらず、得た知識と対話し、深く考え理解し、生きていくために必要なものとして活用する、知識の集合体の洗練化されたもの」と考えることができる。学生の第6～8回目授業の振り返りシートの内容や範囲、学習成果発表会のタイトルから、学生は短期間で幅広く多くの知識に向き合っていた。これは、世界情勢やSDGsとは何かについて学び、幅広い視点で知識獲得のために試行錯誤し、また「健康とは何か」「幸福とは何か」について深く探求した結果ではないかと考えた。医療保健福祉人材の育成に専門知識や技術の習得は欠かせない。しかし、専門知識・技術を提供する対象の健康や幸福について学びを進め・深めるには、人の生の営みに関心を寄せる教養教育・教養科目の活用が必要で効果的であると考えられた。

##### 2) 初年次の多学科連携教育による医療保健福祉領域の対人援助職の人材育成について

今回、要支援者中心の支援についての学びを促進させる教材として「これまでの地域における生活経験と共生社会に期待すること」を講演のテーマとした障がい経験者による語りの聴講を導入した。また、多学科連携を導入し、SDGs目標3を実現するための提案を課題とする話し合いや調べ学習を設けた。

瀬戸山<sup>5)</sup>は、当事者参加型のナラティブに触れることによる学習の特徴として、学習効果の内容の広がりを報告している。本学の学生においても当事者の語りの聴講をととして、障害への理解、支援者としての姿勢、当事者と周囲との関係などについて気づきや省察を得ている様子を確認することができた。そして、この経験を多学科の学生との話し合いを通して、学生は「新たな発見があった」とする記述や、「よいチームワークについて」

表5. 学習成果発表会参加後の記述（振り返りシートより抜粋）

今回の講義で20グループ分の発表を聞いて、まず最初に思ったことは、みんな同じ授業を受け、同じ内容の話を聞いているのにグループによって考えるところが違うと思った。そのことからグループで考え発表することで、1人で考えて解決するより多くの人の意見を聞く方が20グループ分の考え、解決方法を学ぶことができたので、今回の講義は自分にとってとてもためになったと思った。
自分ひとりで調べるとそこまで考えは回らないけれど、グループですることによって他の国でしていることも知ったので、良いところは日本でも取り組んでみるのはいいと思った。
今日の講義の時間で、障害のことや健康づくりの大切さ、交通事故の予防など、授業の中でまだ知らなかったことについて学べたため、新しい知識を得る機会・経験となった。
グループで1つのことについて調べるといって多くのグループが行い、それを発表するというのは、今までやったことはあったが、全く別のことを学んでいる人と関り協力するということがありませんでしたので、将来、社会に出る前に練習という形で、貴重な体験ができて良かったと感じた。
グループの中で自分の意見を言ったり、簡潔に言いたいことをまとめることなど、難しいこともたくさんあったが、専門職を目指す一大学生として、早い段階から自分の視野をわずかではあるが、広げることができたのではないかと考えている。
このような形式の授業でしか、得られない発見や能力があると感じ、もっとこのような形式の授業が増えていったらいいなと思った。
発表の方は、テストと被ってしまいあまり時間が取れませんでした。調べたりする中で、様々な情報を知ることができてとても勉強になりました。
今回の発表によって、SDGs目標3を実現するには様々な視点に立って考えなければいけないということがわかりました。
20グループすべての人の話を聞いて、SDGs 3を達成するための方法には、たくさんの方がいることが分かった。
自分一人では出てこなかったであろう考えがたくさん出てきて新しい考え方を見つけることができた。
障害者は「不幸」ではなく「不自由」なだけという言葉がとても印象が残った。
障害者について着目していたけれど、地域に住んで暮らしているのは、障害者だけでなく子どもや高齢者など様々な年齢層の人であるため、誰もが暮らしやすい地域づくりに着目する必要があると学べた。
同じ目標についてでも、注目するポイントが少し違うだけで、ここまで内容に差が出るなんて面白いなと思った。目が見えない人のSOSの出し方やヘルプマーク、バリアフリー（ノンステップバス）など知らなかったことが多いなと思った。スライドの作り方や説の構成の仕方など私が思いつかないような新しい視点を知ることができて良い時間だった。次似たようなことをする時、今回学んだことを活かしたいなと思った。文字だけでなく、色や大きさ、絵・画像など色々と工夫できるところがあるなと知った。

志向し思考する記述も確認された。あるいは、「学生自身の所属を意識し、自身にとって必要な学びであった」とする記述がある。今回の学生は、入学前の知識・経験を活用して講義に参加し、新たな価値観との出会いに向き合い・楽しみ、健康と幸福について広く学びを深めている。専門知識がない初年次学生であることは、必ずしも医療保健福祉の学びのための学習力の未熟さを示すものではなく、リラックスして経験について語り、省察を行う<sup>6)</sup>ことで、阿部<sup>3)</sup>が述べるような「人間性」や「課題の探求・発見・解決」などの医療保健福祉人材の素地に関する学びが実践されているのではないかと考えた。さらに、チームワークに対する関心や省察の様子は、多職種連携<sup>8-11)</sup>のための学びの素を経験していたのではないかと考えた。学びの内容や環境設定を工夫することで、初年次からでも医療保健福祉人材の育成のための、途切れない学生支援が実践できるのではないかと考えた。

## 5. 課題及び今後の展望

今回、対人援助職を志向する初年次学生を対象に、教養科目であるSDGs概論を活用した医療保健福祉領域における人材の素地育成として、多学科連携教育の実践について報告した。講義参加後の学生のレポートの内容から「広く人と関り学ぶ経験が学生は楽しかった」「良かった」との記述が確認された。障がい経験者の人生

史や現在の生活と幸福感についての語りを聴講し、学科の学生との話合いや課題作成の協同作業に取り組む講義は、広く人と社会と健康・幸福の関係性についての学びや省察を促した可能性や、医療保健福祉職の人材の素地を育成する機会となった可能性が考えられた。しかし、学生の学習上の利益や効果の全体像については整理できていない。今後は、医療保健福祉職を志望する学生の、本講義の学習上の利益について詳細を確認する必要がある。また、学習成果の評価についても課題が残る。今回の講義は、必修科目である教養科目に医療保健福祉人材の素地育成の目的を含有させたものであった。学習成果の評価は、全学共通の科目ルーブリック評価を用いている。医療保健福祉人材の素地育成という視点は科目の学習成果が重複するのか、あるいは医療保健福祉人材の素地育成の評価は「いつ、誰が、何に対し、どのように評価するか」の検討の必要がある。

## 6. まとめ

多様な医療ニーズに対応するために、文部科学省は21世紀に向けた医療人育成について提言をまとめた。そして医療人のような対人援助の教育には、教養科目と専門科目の一貫した教育実践が期待されている。このような社会からの要請を受け、成人学習理論を参考に、本学の初年次学生を対象に教養科目を活用して、医療保健福祉職の人材育成を含有した講義を実施した。講義終了時に

提出された学生の講義振り返りシートから、学生は、人や社会システムについて主体的に学びを進め、医療保健福祉職に期待される人間性の構築や、課題探求・解決に向けた姿勢について学んだと思われる記述が確認された。専門教育が開始されていない初年次学生であっても、広い視野をもって学ぶ教養科目を活用することで、医療保健福祉人の基礎について探求し、学びを深めるこ

とができる可能性が考えられた。そして、初年次は必ずしも学習力の未熟さを示すものではないことが考えられ、初年次学生であっても多学科連携により専門教育の土台学習が可能となるのではないかと考えられた。今後は、講義による学生の学習利益全体を整理し、その評価の実施について検討をする必要がある。

#### Abstract

In order to respond to diversifying medical needs, the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) has compiled a Proposal for the Training of Medical Personnel in the 21st Century. In the education for medical personnel and other interpersonal assistance professionals, in addition to specialized education rooted in the community, education with a broad perspective is necessary and consistent educational practice between liberal arts courses and specialized courses are expected. A multi-departmental collaborative lecture aimed at developing medical health and welfare personnel was held, utilizing the liberal arts courses for first year students with reference to adult learning theory. Reconsiderations by the students after the class confirmed that they were able to study independently with a broad interest in human life, education and social systems, that discussions with students from multiple departments broadened their learning perspectives, and that they reconsidered teamwork. It was thought that even first year students who had not yet studied specialized education subjects could be trained to become medical health and welfare personnel while utilizing liberal arts subjects.

#### 引用文献

- 1) 医療系 e ラーニング全国交流会  
<https://www.jmel.jp/info> 〈2024年5月7日最終アクセス〉
- 2) 21世紀における医療人育成の考え方. 21世紀の命と健康を守る医療人の育成を目指して (21世紀医学・医療懇談会第1次報告)  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/009/toushin/961201.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/009/toushin/961201.htm) 〈2024年5月7日最終アクセス〉
- 3) 阿部和厚 (2004) 医療人材の高度化と大学教育. 高等教育研究 7 : 71-92.
- 4) 西城卓也・菊川誠 (2013) 医学教育における効果的な教授法と意味のある学習方法①. 医学教育 44 : 133-141.
- 5) 瀬戸山陽子・森田夏美・的場典子 (2017) 医療系学生が当事者のナラティブにふれることにより得られる学び－国内における文献レビュー－. 日本看護教育学会誌 27 : 1-10.
- 6) 綾井桜子 (2015) 『教養』研究の現状と課題－学校化された教養を問うために－. 教育学研究 82 : 65-72.
- 7) 三輪建二 (2005) 成人教育論の視点から. 日本学習社会学年報 1 : 43-45.
- 8) 高屋敷明由美・藤井博之・大嶋信雄 (2006) 地域における医療関係職種学生合同実習から参加者が得たものは？－卒前医学教育における職種間連携の教育の意義－. 医学教育 37 : 359-365.
- 9) 榎田めぐみ・片岡竜太・鈴木久義・他 (2015) 臨床シナリオを用いた学部連携PBLチュートリアルが多職種連携教育における有用性の検討. 日本保健医療福祉連携教育学会学術誌・保健医療福祉連携 8 : 10-19.
- 10) 安部博史・矢田浩紀・山本武志・他 (2018) 心理学部初年次生を対象にした多職種連携教育と事前事後デザインを用いた教育効果の検討. 日本心理学会第82回大会発表論文集 : 905.
- 11) 亀山咲子・田島嘉人・澤村彰吾・他 (2023) 医療系大学間連携における多職種連携教育が学生に及ぼす教育効果. 理学療法科学 38 : 193-200.